©日本記者クラブ 2024

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100－0011　東京都千代田区内幸町2－2－1　日本プレスセンタービル　TEL. 03－3503－2722　https://www.jnpc.or.jp/



審判　大幅な議席減が伝えられ、険しい表情を浮かべる石破茂首相=10月27日、自民党本部
撮影：川口　正峰（読売新聞東京本社写真部）

「なぜ呼ばれない政党があるのか」電話の向こうのしわがれた声

日本記者クラブの討論会について先月に続き書くとは思わなかった、とまでは言えない。ただ、ちょっとした驚きではあった。そしてその討論会を振り返る時、どうしても一本の電話が頭を離れない。

10月10日の午後7時近くだった。しわがれた女性の声だった。「12日に討論会があるそうですが、呼ばれない政党があると聞きました。どういう基準で決めているのですか」。言葉を探し探し、途切れ途切れに、おおよそそう告げた。この日、朝からひっきりなしにかかった抗議の電話と同じ趣旨だった。ゆっくり語り掛けた。「国会議員が5人以上いる」「直近の国政選挙で2％以上の得票があった」。この要件をともに満たした政党を招くか、どちらかを満たした政党を招くか、毎回、企画委員会が議論し悩みながら決めている。今回はともに満たす政党を招いた。そう説明すると、遅い時間で電話するか迷ったが、ありがとうございました、と丁寧な言葉が返ってきた。電話の向こうでお辞儀をしているような。そして自分は81歳で、介護保険料を納めてきたが、用いたことはない。使わずに死ねたら幸せだ、毎日ボランティアをしている、と問わず語りに語った。

誰かに言われたか、何かに触発されたのか。いずれにせよ抗議の電話だったのだろう。深い怒りまではなかったのかもしれない。でも、説明に丁寧に礼を返す、ボランティアにいそしむ81歳の女性に、迷いながらも電話をかけさせた思いは、しっかり胸に刻まなければと感じた。

（専務理事　江木慎吾）

衆院選 7党党首討論会



写真左から玉木雄一郎 国民民主党代表、石井啓一 公明党代表、野田佳彦 立憲民主党代表、石破茂 自由民主党総裁、馬場伸幸 日本維新の会代表、田村智子 日本共産党委員長、山本太郎 れいわ新選組代表

有権者の疑問 単刀直入に

橋本 五郎（読売新聞社特別編集委員）

国政選挙でも政党の代表選挙でもそうだが、日本記者クラブでの討論会で私たちが常に心がけているのは次の一点に尽きる。「ごく普通の国民が疑問に思っていることを単刀直入に質す」。そして、それにどう答えたかが選挙でも確実に審判されるということである。

石破さんに対しては、「政治とカネ」の問題についても、外交・安保政策でも、これまでの「党内野党」的、現状打破的な発言と総理・総裁になってからの言行の整合性が問われた。しかし、党首討論会で目立ったのは、トーンダウンしたことへの言い訳ばかりだった。選挙戦終盤になっての「2000万円」問題も含めて、何が国民の指弾の対象になっているのかということへの真の理解に欠けていたとしか思えない。

大幅に議席を減らし党首も落選するという惨敗を喫した公明党も同様である。私たちは25年にわたる自公連立の見直しの必要を感じないのかと問うとともに、自民党が非公認とした候補を推薦するというのは「クリーン」を標榜する政党として自滅的な振る舞いではないかと質した。選挙結果は、四半世紀にわたる自民党との持ちつ持たれつの関係が厳しく審判されたと見るべきだろう。

一方で、立憲民主党は「政権交代こそが最大の政治改革」をキャッチフレーズに自公の過半数割れを目標に掲げ奏功した。「穏健保守」の野田さんの登場も有権者に安心感を与えたかもしれない。しかし、衆院選で実現できなかった野党の一本化への努力は、これから真に問われることになるのである。

私は党首討論で国民民主党の玉木さんに、中道政党は主張が正しくともインパクトがなく勢力を伸ばせない宿命を負っている。どういう道を選ぶかと問うた。玉木さんは「国民生活が良くなるための政策を一つでも二つでもできれば本望だ」と答えた。「政治とカネ」一色となる中で、玉木さんが「手取りを増やす」と終始唱えたことが共感を呼んだことは間違いないだろう。手前みそになることを恐れつつ、私たちの役割の重要さを改めて考えざるを得なかった。

（代表質問担当）

目次

▼7党党首討論会 2・3
▼今月のクラブゲスト 5
▼会見リポート 6・8
イゼルディン・アブラエーシュ パレスチナ・ガザ地区医師／朴喆熙 駐日韓国大使／旧ジャニーズ性加害問題 被害当事者／益尾知佐子 九州大学大学院教授／袴田ひで子さん、小川秀世 弁護士（袴田事件弁護団事務局長）／笠井千晶さん 袴田巖さんを追ったドキュメンタリー映画「拳と祈り」監督
▼ワーキングプレス 9・11
袴田巖さん再審無罪確定 静岡新聞社 佐藤章弘
石破首相 総選挙の敗因 共同通信社 内田恭司
中国・深圳 日本人男児刺殺事件 ANN 尾崎文康
▼被災・防災・減災 最前線
能登半島 記録的豪雨 読売新聞社 高倉正樹 12
▼リレーエッセー 13
吉田正紀さん 元海上自衛隊海将、前防衛大臣政策参与 TBSテレビ 佐藤祥太
▼書いた話書かなかった話 14・15
金大中事件 10年後の特報
日本の公安 拉致前に察知 金平茂紀
▼試写会「草原の英雄ジャロロフ」 16
▼記者ゼミ 16
▼マイBOOKマイPR 17
▼写真回廊 20

政策議論 十分深められず

佐藤 千矢子（毎日新聞社 論説委員）

「厳しく質問しよう」「時間の許す限り再質問をし、表面的な答えに逃げられないようにしよう」。衆院選の7党首討論会に、代表質問団でこれらの原則を確認して臨んだ。

2022年参院選から5党首が交代し、論戦の変化に注目していた。結果は、相手の質問を受け止めて、自分の言葉で話すという、基本姿勢ができていた党首が多かったように思う。議論自体は活発だった。

ただ、有権者に選択の材料を示せたかどうかについては、忸怩（じくじ）たる思いがある。自民党の裏金問題が主要な争点となり、限られた時間の中で、経済や外交など政策の議論を十分に深めることはできなかった。

質問団の事前打ち合わせでは、「政治とカネ」の問題を簡単にすませ、政策をじっくり議論したらどうかという意見も出た。しかし、政策遂行の基盤となる政治への信頼が崩れた中での選挙ということを考えると、やはりそれはできなかった。

討論会の前日、日本原水爆被害者団体協議会のノーベル平和賞受賞決定というニュースが飛び込んできた。核兵器禁止条約へのオブザーバー参加問題について、第1部の討論で明言を避けた石破茂首相に、第2部で重ねて聞いた。首相は、核抑止力と核廃絶について「両立可能なのか検証は必要」と述べただけだった。

今回の討論会を引き継ぐ形で、また次の誰かが、この問題をさらに深めてほしいと願っている。

（代表質問担当）

再質問で応酬促しては

山下 毅（NHK 解説委員長）

自公大敗となった衆院選の論戦スタート。「後ろめたさ」がある。第2部で石破総裁が政策活動費について思わず漏らした本音は選挙戦の厳しさを象徴していたとも言える。

第1部の党首同士の討論は前日の「日本被団協のノーベル平和賞」を取り上げた野田代表が口火を切った。石破総裁は歯切れが悪かったが、翌日の核兵器禁止条約へのオブザーバー参加を「真剣に検討」の発言につながった。政府の方針変更に帰結するなら嚆矢（こうし）となった意義はある。

その後も維新と公明が〝裏金〟非公認議員の推薦などをめぐって応酬し、見せ場はあった。しかし、1往復半の計2分半を2巡というフォーマットでは「広く浅く」なりがちだ。議論が燃え盛る前に鎮火するかのごときで、党首同士の行儀のよいあっさりした討論に終わった感は否めない。

思い切って1巡にして、質問・回答1分ずつ、再質問・再回答1分ずつ、コメント1分の2往復半にしてはどうか。一つのテーマを深掘りできるし、回答側にも再反論の機会が与えられる。また討論会が始まる前の説明などを通じて、党首たちの闘争心に火を点けることも重要だと感じた。

（第1部司会担当）



応酬を交わす自民党の石破総裁（右）、立憲民主党の野田代表





写真左 討論会開始前に、控え室で党首たちに説明する総合司会担当の小栗泉企画委員（右）と第1部司会担当の山下毅企画委員

実施要領メモ

▼**日時**：10月12日（土）14：00～16：00（公示10月15日）10階ホール▼**登壇者**：石破茂自由民主党総裁、野田佳彦立憲民主党代表、馬場伸幸日本維新の会代表、石井啓一公明党代表、田村智子日本共産党委員長、玉木雄一郎国民民主党代表、山本太郎れいわ新選組代表▼**進行**：【第1部】（約50分）7党首が「一番訴えたいこと」をボードを用いながら主張（持ち時間1分）。その後、党首同士の討論。相手を指名して質問、相手が回答（各1分）、質問者がさらにコメントする（30秒）の形式で2巡行った。【第2部】（約70分）＝企画委員の代表が質問（回答時間は1分）▼**総合司会**：小栗泉企画委員、**第1部司会**：山下毅企画委員、**代表質問者**：橋本五郎、西山公隆、佐藤千矢子、菅野幹雄の各企画委員▼**参加者数**：会場（スチル・ムービー含む）150人、オンライン81人▼NHKが生中継。民放の中継代表はフジテレビ。ムービーはテレビニュース映画協会代表（フジテレビ、テレビ東京）、東京写真記者協会代表（毎日新聞）など6社13台▼スチルは東京写真記者協会（各社1人）、在日外国報道協会代表（AP通信）▼参加政党の一部が公式のスチル、ムービーを入れた▼会員向けにライブ配信を行った。日本記者クラブ写真撮影は津野義和氏（ガンマ通信）。

※第1部終了後、政党要件のいずれかのみを満たす福島瑞穂社会民主党党首、神谷宗幣参政党代表の主張を動画で紹介した。

党首討論の参加は7党に
社民、参政から見直し要請

国政選挙の前の党首討論会は通常、公示日の前日に開く。だが、今回は公示日10月15日が新聞休刊日で14日に討論会を実施してもその中身を伝える朝刊はない。おまけに13、14日は日本プレスセンタービルの全館停電が予定されていた。各党には12日の開催を持ち掛けた。開催が決まったのは8日になってからだった。

2022年の参院選の討論会後、政局の動向をにらみつつ、毎月開く企画委員会で来る衆院選の党首討論会の開き方について何度か議論した。党首討論会は今回で20回目になる。招く政党については「国会議員が5人以上いる」「直近の国政選挙で2%以上の得票があった」という、二つの基準がもとになっている。この二つの基準を「ともに満たす」政党を招くか、「どちらかを満たす」政党を招くかを企画委員会が決めてきた。

昔は討論会に3時間以上をかけていたこともあったが、このところは2時間、うち半分弱は党首同士の討論、半分強は企画委員による質問というパターンが定着している。質問団の企画委員は毎回、各党首が聞かれて「痛い」と思う質問を準備し、進行について細かく打ち合わせて臨む。それでも用意した質問すべてをぶつけることはできない。

毎回、どうすればやりとりを深められるかが議論になり、参加する党首の多さも話題にのぼる。過去には国会議員が5人いた新社会党を招かなかったこともある。今回は議論の結果、前述の基準を「ともに満たす」政党を招くことが、早い段階で決まった。

社民党と参政党が法律上の政党要件を満たしながら、招かれる党から外れた。このことが伝わると、社民党の福島瑞穂党首、参政党の神谷宗幣代表から10日に抗議と申し入れのためにクラブを訪れたいとの連絡があった。

午前11時半に、まず社民党の福島さんが来た。「10月12日党首討論会への登壇の申し入れと抗議」とする書面を手渡された。福島さんの主張は①公示前ではあるが、日本記者クラブの党首討論会はもはや選挙と一体と考えるべき極めて重要な討論会であり、公選法の縛りを受けると考えるべきだ②その極めて重要な討論会から国政政党を排除するのは公選法上も問題だ③少数意見を排除するのは、国民の知る権利に資する日本記者クラブの判断としておかしい④社民党にとって死活問題であり、死刑宣告に等しい――として再考を求めるものだった。

午後3時半には「党首討論会から少数政党を排除した理由の説明と公正な基準への見直しを求める要望書」とする文書をもって参政党の神谷さんが来た。こちらの主張は①参加政党を区切ることは、国民に対する情報提供の公平さを著しく欠く行為であり、明確な理由の説明を求める②報道活動を通じて国民の知る権利に資する団体として、排除することは大きな問題③全国で90人以上の候補者を擁立している参政党を参加させないことは、民主主義の健全なプロセスを阻害する④前回の衆院選では9政党が参加しており、政党数に変化はない――といったものだった。

二人とも穏やかだったが言葉は強かった。当クラブの党首討論会を重く見ていることが伝わってきた。こちらからは招く政党については基準に基づいて毎回、企画委員会が議論して決めていることを説明し、11日にある企画委員会に両党の主張と要求を伝えると約束した。

11日の企画委員会は、両党の主張にかんがみ、何らかの対応策をとるべきだとの合意に達した。両党の主張を1分のビデオに収めてもらい、討論会の会場に流すことが提案された。

この提案について打診した結果、両党ともこの選挙で一番訴えたいことを映像に収めて送ってくれた。映像は討論会の第1部の最後に会場に流れた。

鳴り続けた抗議の電話
共産党からも申し入れ

10日朝から、事務局の電話は鳴り続けた。なぜ招かないのかと尋ねる電話から始まり、国政政党を招かないのはおかしい、差別するなという主張など、穏やかな声もあれば怒鳴り声もあった。10日から11日にかけて、ほぼずっと事務局のだれか、時にはほぼ全員が電話応対している状態で、職場定例の打ち合わせもできなかった。

討論会の前日には共産党からも討論会に2党を参加させるべきだとの申し入れがあった。

今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見リポートは右のQRコードを開きウェブサイトで読めます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。

＊下記のゲストの会見リポートは６～８ページに掲載しています

Izzeldin Abuelaish（イゼルディン アブラエーシュ）さん パレスチナ・ガザ地区医師

■10・4／出席：会31人、オ36人／司会：出川展恒委員／通訳：長井鞠子さん

朴 詰煕（バク チョルヒ）さん 駐日韓国大使

■10・7／出席：会52人、オ38人／司会：澤田克己委員

旧ジャニーズ性加害問題 被害当事者

志賀 泰伸（しが やすのぶ）さん
長渡 康二（ながと こうじ）さん
中村 一也（なかむら かずや）さん

■10・9／出席：会48人、オ38人／司会：早川由紀美委員

益尾 知佐子（ますお ちさこ）さん 九州大学大学院教授

■10・23／出席：会27人、オ38人／「中国で何が起きているのか」⑳／司会：高橋哲史委員

袴田 ひで子（はかまた ひでこ）さん
小川 秀世（おがわ ひでよ）さん 弁護士（袴田事件弁護団事務局長）

■9・30／出席：会67人、オ49人／司会：井田香奈子委員

笠井 千晶（かさい ちあき）さん 袴田巖さんを追ったドキュメンタリー映画「拳と祈り」監督

■10・15／出席：会20人、オ20人／司会：井田香奈子委員

辻 琢也（つじ たくや）さん 一橋大学大学院教授



「人口を持続的に推移させるためには、2.0前後の出生率を実現し、社会増減をゼロ程度に抑制する戦略が現実的だ」「社会増は外国人等の増加を伴う場合が多い。自治体は外国人が活動しやすい社会を構築するか、人口減少を甘受するかの厳しい選択を迫られている」

■10・2／出席：会12人、オ31人／「自治体消滅にあらがう」④／司会：小林伸年委員

鈴木 啓之（すずき ひろゆき）さん 東京大学特任准教授



「中東情勢は収束をみせず、混乱が広がっている。ガザ地区での精神疾患など人道危機は深刻化している」「イスラエル国内での政治的駆け引きの中で、ガザでの戦闘は重点を占め、停戦に向け気運は高まっていない。収束のシナリオは容易には描けない状況だ」

■10・3／出席：会22人、オ45人／「ハマス・イスラエル衝突」⑧／司会：出川展恒委員

棚野 孝夫（たなの たかお）さん 白糠町長（しらぬか）、北海道町村会長



白糠町が10年前に続き「消滅可能性自治体」に名指しされたことを受け、「18歳までの医療費、保育料の無償化などの子育て支援や一次産業の発展を柱に必死に町づくりしてきた。人口減少は国が取り組む問題。国が『消滅』という言葉を地方に対して使うのは遺憾だ」。

■10・16／出席：会13人、オ21人／「自治体消滅にあらがう」⑤／司会：小林伸年委員

笠原 順三（かさはら じゅんぞう）さん 東京大学地震研究所名誉教授



「今年に入り、南海トラフを囲むフィリピン海プレート周辺の地震活動が活発化している」「鳥取地震（1943年）後、日本海側と南海トラフの地震が連動して起きたと思われる地震活動があった」「安全サイドからみると日向灘の地震活動が（南海トラフに）関連する可能性もあると考えた方がいい」

■10・25／出席：会12人、オ35人／「巨大地震を考える」③／司会：倉澤治雄委員

イゼルディン・アブラエーシュ
パレスチナ・ガザ地区医師
「平和は力では実現できぬ」
10月4日



我が子の命を奪い、同胞を殺し続ける者たちの側と、平和を築けるか。その困難な問いに、当事者として明確な「イエス」を訴え続けている人、それが、パレスチナ自治区ガザ地区出身のイゼルディン・アブラエーシュ医師（69）だ。自らの体験を描いた映画「私は憎まない」（英題「I Shall Not Hate」）の日本上映を機に、現在住むカナダから来日。10月4日に日本記者クラブで会見した。

ガザ北部ジャバリア難民キャンプで生まれ育った。努力の末に産婦人科医となり、イスラエルの病院に勤務する初めてのパレスチナ人医師となった。亡き妻ナディアさんとの間に8人の子宝にも恵まれた。しかし、イスラエル軍が実施した「キャスト・レッド作戦」の終局に近い2009年1月16日、自宅をイスラエル軍戦車が砲撃。長女ベサンさん（21）、4女マヤールさん（15）、5女アヤさん（14）とめいのヌールさんが死亡した。他の子や親族も負傷した。

「当時、娘たちが平和への最後の犠牲なら、受け入れると言いました。残念だが最後ではなかった」

23年10月7日の発生から1年を超えた今次のガザ紛争は、終結の糸口も見えない。ガザでは4万人以上、イスラエルでも1200人の死が地元当局により報告されている。アブラエーシュ医師の親族も多数が亡くなったという。イスラエルはレバノンに戦線を拡大、イランとの衝突も懸念される。

それでもイスラエル、パレスチナの双方に対話を訴える気持ちは変わらない。「これからも主張する。銃弾は弱い者の武器であり、平和は力では実現できないということを」

即時停戦を求める一般市民の活動は日本を含め世界に広がっている。「誰かを待つのではなく、できることに自ら取り組んでほしい」。アブラエーシュ医師の日本への伝言だ。

毎日新聞社川崎支局長　和田　浩明

朴喆熙
駐日韓国大使
新「日韓共同宣言」に意欲
10月7日



8月に着任した朴喆熙（パクチョルヒ）・駐日韓国大使が、公の場で初となる会見に臨んだ。朴氏は日韓国交正常化60年を来年に控え、新たな「日韓共同宣言」の発出に向けた具体的な構想に言及。両国間の懸案に対する見解はおおむね想定された範囲にとどまったが、世界文化遺産登録が決まった「佐渡島の金山」を巡り日韓合意の履行を強く求める一幕もあった。

朴氏は1998年の当時の小渕恵三首相と金大中（キムデジュン）大統領による「日韓共同宣言」に代わる、新たな共同宣言作りに意欲を示した。宣言には、戦後100年となる2045年までに「より希望ある日韓関係」を構築する方策や、両国間の出入国手続きの簡素化を含め「関係改善のメリットを肌で感じられるような具体的な事業」を盛り込むことを提言。韓国側で原案作成の動きが一定程度進んでいる状況をうかがわせた。

歴史認識問題の記載を巡る日韓協議の難航が予想されるため、日本側では新宣言に消極的な意見もある。これに対し、朴氏は「最低限」の記載があれば十分であり「特定の言葉にこだわる必要はない」との立場を示し、懸念を払拭（ふっしょく）するよう促した。

一方、「佐渡島の金山」を巡り朴氏は、日韓協議で実施が決定された、朝鮮半島出身者を含む労働者の追悼式に向けた日本側の日程調整が遅れていると指摘した。韓国メディアでは9月中に実施されるとの報道もあったが実現せず、外交当局に対する韓国野党などの圧力が強まりつつある。朴氏は政務官以上の日本高官が式典に参加して「誠意を見せてほしい」と求めた。

会見終了にあたり、朴氏は「日韓、傷から絆へ」と記した揮毫（きごう）を披露。尹錫悦（ユンソンニョル）政権発足以前の「失われた20年」で、日韓が長らく「互いを傷つけることがあった」と振り返り、「傷を越えて絆を作る」必要性を強調した。朴氏は冒頭発言から質疑まですべて日本語で応じ、韓国を代表する〝日本通〟としての貫録を示した。

産経新聞社外信部　時吉　達也

旧ジャニーズ性加害問題 被害当事者「全容の解明されていない」

10月9日



左から長渡康二さん、志賀泰伸さん、中村一也さん

「問題は風化の一途をたどっているが、未来の子どもたちが被害に遭わないために、声を上げ続けていかなければいけない」

故ジャニー喜多川氏からの性被害を訴えてきた当事者は、会見を開いた理由についてこう語った。この日会見に登壇した3人は、旧ジャニーズ事務所（現SMILE-UP.社）が性加害を認めたことを受け、被害当事者が開いた昨年9月の会見にも出席していた。1年前の表情とは異なり、沈んで見えた。

当事者たちは、スマイル社によって被害の時期や背景といった全容の解明がなされていないと指摘。「補償金さえ払えば終わりとするのではなく、全容解明をした上で、再発防止策を打ち出すべきだ」と語った。

また、昨年10月以降、同社がこの問題で記者会見を開いていないことについても触れ、「実態は不透明のままで、あまりにも不誠実だ」と批判した。

この日は、被害を告白した後に誹謗中傷を受け、昨年10月に自死した40代男性の妻からの手紙も読み上げられた。「夫も私たち家族も、心ない言動、誹謗中傷などで二次被害に遭ってきたが、少しでも未来の子どもたちが過ごしやすい世の中になるように願っている」と伝えられた。

会見では、この1年を振り返っての思いを尋ねた。アイドルグループ「忍者」元メンバーの志賀泰伸さんは、時折声をつまらせながらこう答えた。「実名顔出しで被害を告白してからはものすごい数の誹謗中傷があり、本当に苦しかった。この1年は『なんとか生きてきた』というのが正直なところだ」

これだけ苦しい思いをしてきた被害者たちが、なぜこの場に立たなければいけないのか。そう感じざるを得なかった。この問題はまだ終わっていない。だからこそ、記者としてできることは書き続けることだと、改めて感じた。

朝日新聞社東京社会部　島崎　周

「中国で何が起きているのか」⑳ 益尾　知佐子 九州大学大学院教授 日中「異なる平和のかたち」

10月23日



「とどのつまり、日中関係はなぜうまくいかないのか」。中国の対外政策が専門の益尾知佐子氏はこう切り出した。食事を共に楽しめる。話も合う。個人として分かり合うのは難しくないのに、国家間の話には埋められない見解の齟齬（そご）がある―。益尾氏は要因を、日中が希求する「平和のかたち」があまりに異なるためだと読み解く。日本は「アメリカの覇権が打ち立てた自由民主的な秩序が維持され、貿易や経済交流が継続される」のを平和と捉えるのに対し、中国にとっての平和は「台湾が『解放』され、朝鮮半島から、願わくば日本からも米軍がいなくなり、台湾と第1列島線の中に米国の影がない状態」だと分析。こうした主張を日本は受け入れられず、西側と中国が拮抗する国際関係の「綱渡り状態」が相当長い期間続くと見通した。その上で中国の考え方を理解し、互いに妥協案を探る必要があると提起した。

中国は米中関係を「主要矛盾」と捉えて対外政策として統一戦線工作に取り組んでおり、今後は「国家安全力」の増強を含む「新型の一帯一路」を発展途上国に売り込むと見立てた。また、日本や、民主進歩党が率いる台湾は米国に近すぎて「引っぺがしてくるには難しい存在」に見えていると指摘。ただ最近は経済立て直しのための「休戦」として、対日関係改善を望むメッセージを発しているとみる。

一方、中ロが連携して、サンフランシスコ平和条約は見直しが必要であり、沖縄の国際的な地位は未定だ―との歴史法律戦を来夏に向けて強化してくると予測。南西諸島の防衛力配備を阻止する狙いから、「琉球独立」論を巡り「トップから指令が出ていると聞いている」とも明かした。こうした状況下で、益尾氏は、政府はあくまで日本産水産物の輸入再開や、在留邦人の安全確保といった具体案を求める対中外交を続けるべきだと提言。日中の研究者交流が減少した現状への懸念も示した。

共同通信社政治部　鮎川　佳苗

袴田　ひで子さん
小川　秀世 弁護士（袴田事件弁護団事務局長）
ひどい報道は時代のせいか

9月30日



静岡地裁の再審無罪判決から4日後の9月30日、袴田巖さん（88）の姉ひで子さん（91 右）と弁護団の小川秀世事務局長（左）が日本記者クラブで会見した。この間、ひで子さんは判決当日の報告会見はもちろん、28日は東京で日弁連主催の集会に、29日には静岡で静岡県弁護士会主催の集会にそれぞれ出席。「ちょっと、くたびれた」と口にしていたが、会見ではそのそぶりも見せず、判決の受け止めや弟の様子を気丈に語った。

再審開始の可否を判断する再審請求審で、袴田さんの再審開始を認めた二つの裁判体が捜査機関によって証拠が捏造（ねつぞう）された「疑い」や「極めて高い可能性」を指摘してきた。再審判決の構造を説明した小川弁護士は、三つの証拠捏造があったと明確に認定した判断について「再審開始決定よりも踏み込んだ。冒頭で証拠から排除し、残りの証拠では有罪は認められないとした内容は分かりやすく、大胆」との認識を示した。

一方、判決は弁護団が無罪を証明するとしたDNA型鑑定の信用性などを否定した。小川弁護士は「（捏造と認定した）『5点の衣類』以外は弁護団の主張をあまり採用せず、これまでの間違った裁判所の判断にのっとっているものが多い。検察の〝証拠隠し〟についても一言も言っておらず大いに不満」と述べた。

質疑応答で、ひで子さんに事件当時の報道を尋ねてみた。「よくもひどいことを書いてくれたと思うが、あれは警察の言う通りに書いただけだと思っている。あの時代は、そういうことを平気で書いた。（今は）何とも思っていません」。ひで子さんは「あの時代は」としたが、果たして現在はどうか。事件報道に携わる一人一人が改めて自らに問いかけるべき重い言葉だと受け止めた。

会見が終わり、帰り際のひで子さんと居合わせた。思いがけず手を差し出され、握手した。温かく、この姉あっての再審無罪だと思った。

静岡新聞社社会部　佐藤　章弘

笠井　千晶
記録を映画に 後世に残す

袴田巖さんを追ったドキュメンタリー映画「拳と祈り」監督

10月15日



すべてはここに始まり、ここに終わったということか。会見ではまず袴田事件を追った映画「拳と祈り」のダイジェスト版が上映された。

冒頭、取り調べの記録音声が流れる。「ふざけてるよ」「俺の一生をむちゃくちゃにしたのはあんたらだ」「一生忘れんぞ」――張りのある声。当時袴田さんは30歳だった。

映画を制作した笠井さんが「袴田事件」を知ったのは2002年、静岡放送の報道記者になって2年目だったという。事件は忘れられつつあったが、「確定死刑囚」という存在に衝撃を受ける。袴田さんの姉、ひで子さんに連絡をとった。深く長い交流が始まった。

「記録を映画にして後世に残さないと」と思ったのは10年前。再審が認められ、袴田さんが47年7カ月ぶりに釈放されたときだった。その夜、ホテルで袴田さんとひで子さんが枕を並べて眠る姿を見た。「こんなふつうのことがなぜ長年できなかったのか？」という思いが湧きあがった」と話した。

逮捕から58年。検察は上訴権を放棄し、無罪を言い渡した静岡地裁の再審判決が確定した。同時に、捜査機関が証拠を捏造（ねつぞう）したと認める再審判決は、「到底承服できない」とする検事総長の談話も公表された。

「捜査に誤りはない」「判決がおかしい」と改めて主張することで検察は何を守ろうとし、社会はそんな検察の姿勢に何を見たのか。死刑囚の再審無罪判決は戦後5例目。強引な捜査や人質司法の問題を訴える声が絶えない。

会見の最後、笠井さんは検事総長の談話に触れて語った。「遅くはない。無罪が確定したからには、今後、二度とこういうことが起きないよう取り組んでいただけるものと期待している」

この22年間、戦いをつぶさに見てきた人だ。「期待する」という言葉には、笠井さんの「祈り」も込められていたに違いない。

朝日新聞社文化部　大嶋　辰男

袴田巖さん再審無罪確定

刑事司法の問題 凝縮

報道の検証も不可欠

佐藤　章弘（静岡新聞社社会部）

静岡県の旧清水市（現静岡市清水区）で1966年、みそ製造会社の専務一家4人が殺害された事件を巡り、死刑とされてきた元プロボクサー袴田巖さん（88）のやり直しの裁判（再審）で静岡地裁は9月26日、無罪判決を言い渡した。検察は控訴せず、判決は10月9日に確定した。

事件発生から58年、袴田さんが再審を求めてから43年。あまりにも長過ぎる時間が流れ去った。刑事司法の問題が凝縮されており、地元紙の記者として、無罪判決は新たな取材の始まりなのだと受け止めている。

司法の責任言及なしは遺憾

静岡地裁判決は、捜査機関による三つの証拠捏造（ねつぞう）を認定した。警察と検察の「連携」を強調した点が目を引く一方、捏造以外においては弁護団の主張を退けた部分も実際は多かった。個人的には判決言い渡し後に裁判長が司法の責任に言及するかどうかに注目したが、裁判の長期化について「裁判所としても申し訳なく思っている」と述べただけだった。「謝罪」とはとても思えなかった。

検察に至っては、無罪判決を真剣に受け止めているのか極めて疑わしい。検事総長が控訴断念に際して公表した談話は、捏造認定に「強い不満」を表明。判決理由には多くの問題が含まれているとして「控訴して上級審の判断を仰ぐべき内容」と批判した。弁護団が「いまだに犯人視していて名誉毀損になりかねない」と撤回を要求したのは当然だった。



再審無罪判決確定後、静岡市内で開かれた集会に参加し祝福される袴田巖さん（中央）。左は姉ひで子さん（10月14日/静岡新聞社提供）

刑事再審に限れば、日本は過ちから学んできたとは言いがたい。無罪判決直後の連載テーマを誤判救済▽原因究明▽予防――にしたのは、この三角形が再発リスクを減らすために不可欠と考えるからだ。第三者の調査が必要で、東京電力福島第1原発事故の国会事故調査委員会で委員長を務めた黒川清政策研究大学院大名誉教授は取材に「人は間違う。失敗から学ばないことが問題」とした。

再審法改正を軸に企画展開

私が袴田さんの取材に携わるのは2度目だ。最初は静岡地裁が再審開始を決め、死刑と拘置の執行停止を認めて釈放した2014年の前後3年間。19年から再び担当する中、とりわけ感じてきたのが再審法（刑事訴訟法の再審規定）の不備だった。

静岡新聞は22年12月、再審法の改正を主眼に置いたキャンペーン企画「最後の砦　刑事司法と再審」を開始した。再審事件ではないものの死刑から一転無罪となった本県発生の「二俣事件」を題材に冤罪が多方面で被害者を生み出してしまう現実を描き、袴田さんや「島田事件」、他の再審事件に具体的な課題を見た。

企画タイトルは再審制度が救済の「最後の砦」であることにちなむ。他方で再審法の改正を求める動きを歴史的にさかのぼれば、それを拒んできたのが法務・検察だと分かる。法改正を実現する上で立法府こそが「最後の砦」なのだと位置づけ、全国会議員にアンケートを実施。日本の再審法をルーツとしながら、この10年間で2度の法改正を重ねた台湾も訪ね、参考にすべき点を伝えた。

刑事司法や冤罪は、当事者にならない限りは別世界の出来事のように思われてしまいがちだ。関心を寄せてもらう一つのきっかけになれば――と再審判決を前に、袴田さんが受けた過酷な取り調べを追体験できる仮想現実（VR）アプリ「最後の砦VR」を取材班で開発し、公開した。

問われているのは捜査・公判の問題だけではない。事件当時の本紙をめくれば「異常性格者か」といった信じがたい見出しが躍る。袴田さんを犯人視し、名誉を傷つけたことへの謝罪記事を今回掲載したが、徹底した検証が欠かせないと痛感する。

さとう・あきひろ▼2006年4月入社　整理部　東部総局　天竜支局などに勤務　19年1月から現職

石破首相 総選挙の敗因

ぶれた裏金議員への対応

温情2000万円もあだに

内田 恭司（共同通信社編集委員兼論説委員）

今回の衆院選で自民、公明両党で過半数を大きく割り込むなど、与党が歴史的惨敗を喫した。私自身も与党でぎりぎり過半数は取れると思っていただけに、正直驚いた。

それにしても、なぜ自民党はここまで大敗したのか。裏金問題や世界平和統一家庭連合（旧統一教会）問題といった、いわば旧安倍派の負の遺産があったとはいえ、それでも勝利すべく総裁選で石破茂新総裁を選出し、「表紙替え」した上で衆院解散・総選挙に臨んだはずだ。

しかも、候補者一本化など野党の態勢が整わないよう、首相就任からわずか26日後に投開票という異例の短期決戦まで仕掛けた。

敗因はいろいろとある。石破首相は、「やる」と言った予算委員会をやらないなど、首相になった途端に変節したと受け止められた。

だが、やはり大きかったのは、裏金議員への公認・非公認を巡る対応でぶれたこと、非公認候補に2千万円の政党助成金を支給したこと、この二つなのではないか。

いずれも総裁である石破首相と、選挙戦を仕切る森山裕幹事長の判断だ。では、なぜ2人はこうした判断をしてしまったのだろうか。

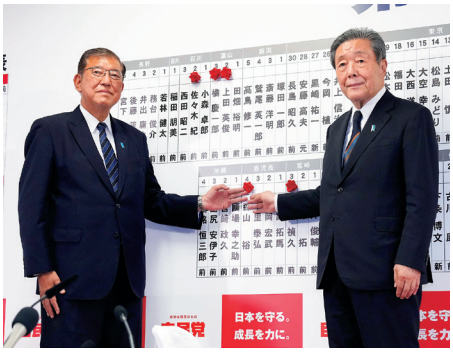
裏金議員は全員非公認にすべきだという意見は党内にもあった。小泉純一郎元首相が郵政解散で行ったように、裏金議員には対抗馬となる「刺客」を立てるべきだという声すら出ていた。

だが、石破首相はこうした方針を取らず、一時は、裏金議員を全員公認し、比例代表との重複立候補も認める方向で検討が進んだ。

自ら「政治とカネ」に潰かり

この「甘さ」の背景には何があるのだろう。首相はかつて、リクルート事件に端を発した「政治とカネ」問題を徹底的に批判し、他の若手政治家とともに政治改革の実現にまい進した。

あれから30年。首相の感覚が鈍り、判断が甘くなったのだとすれば、結局は首相自身も「政治とカネ」の世界に潰かり、表に出せないカネを間近で見続けてきたからだとしか考えられない。



当選を決めた自民党の森山裕幹事長（右）の名前にバラを付ける総裁の石破茂首相（10月27日/自民党本部/共同通信社提供）

首相は2012年から2年間、幹事長を務め、この間に計14億円もの政策活動費を差配した。このカネの使途を首相は一切説明しない。「闇のカネ」として使ったのなら、今回の裏金と何ら変わらない。

自民党の宿痾（しゅくあ）とも言うべき「政治とカネ」問題に自身も手を染めてきた。だからこそ、裏金議員への判断も鈍くなった。甘さの背後にあるのは、そういうことではないか。

甘さ捨て非情になれるか

森山氏も同じだ。2千万円の支給は森山氏が主導したと聞く。なぜ、事実上の公認料と受け取られるカネを出したのか。やはり森山氏にも甘さがあったのだろう。

郵政政局で森山氏は造反し、仲間の多くが刺客を立てられ落選した。森山氏はこの時のつらさや悔しさを、身をもって知っている。だから今回は、せめて裏からでも支えてあげようと温情から2千万円を支給したのなら、その甘さが完全に裏目に出たとしか言いようがない。

この先、石破首相の政権運営が非常に厳しいものになるのは間違いない。それでも乗り切ろうとするのなら、首相は自らの甘さを捨て、非情に徹するしかないのではないか。

惨敗を国民の意思と受け止めて政治改革を断行しようとすれば、党内から造反や反対論が出る可能性がある。政権の命脈が懸かる2025年度予算成立の局面や、直近の首相指名選挙でもそうだ。

ここで首相は、造反者は除名し、反対する議員は処分するくらいの姿勢で臨むしかない。それほどの覚悟を見せないと、あっという間に党内で揺さぶられ、ぜい弱な政権基盤はますます崩れていく。

その先に待つのは無念の退陣でしかない。

うちだ・きょうじ▼1991年入社　岐阜支局などを経て　99年から政治部　同部デスク　担当部長　編集局整理部長　2022年4月から現職

中国・深圳 日本人男児刺殺事件

途切れぬ献花 涙する市民
説明なく邦人の不安拡大

尾崎 文康（ANN上海支局長）

最初にその異変に気づいたのは、同僚の田村信大カメラマンだった。「校門の前に、人が集まっているようです」

事件翌日の9月19日昼。中国・深圳（シンセン）市の日本人学校前に、日本人の男の子の死を知った中国人たちが続々と献花に集まっていた。年配の男性やサングラスの若い女性らが、静かに手をあわせていく。

まずは田村氏が一眼レフを構えて撮影し、急いで映像を東京の局へと送り始めた。僕も入れ替わりでスマートフォンのカメラを向けた。



男児が亡くなった日、校門前への献花は途切れることがなかった（9月19日/中国・深圳市/筆者提供）

「事件にとても心が痛みます。全ての中国人がこうではない、とわかってほしい」（男性）。「こんな暴力があってはいけない。私たちは日本人との交流がとても好き。子どものために祈りを捧げなければなりません」（女性）

献花は途切れず、多くの人は涙声だった。

3カ月で2度の殺傷事件

ANN上海支局に今年着任して以来、日本人が襲われ、急きょ事件現場へと駆け付けるのはこれが2度目だ。

最初は6月下旬、江蘇省・蘇州市で日本人親子がスクールバス停留所で男に切りつけられ、その親子をかばった中国人女性が殺害された事件。

そして9月、広東省深圳市で、通学中の10歳の男の子がいきなり男に刺された事件だ。わずか3カ月で2件、被害者はいずれも子どもだった。

中国は監視カメラが多く、街頭犯罪は少ないはず――。そんな勝手な僕の思い込みは、着任後すぐに吹き飛んだ。深圳の空港から現場へとタクシーを走らせながら、「なぜ子どもばかりが襲われるのか？」「日本人が標的なのか？」と、次々と疑問が浮かんだ。

明くる日の朝、男の子が亡くなったという悲痛な知らせが広まると、中国の日本人社会は騒然とした。「事件が続くのが怖い。ニュースを聞いてから動悸が止まらない」「怯えて過ごす生活を、このまま子どもたちに強いてよいのか」。子育てをする母親たちからは、苦悩の言葉を聞いた。

一方で、深圳の校門前に花をたむける中国人たちを取材しているとき。不思議と、凝り固まった自分の中の「警戒心」が溶けていくような感覚もあった。

実は僕にも、幼稚園に通う小さな子がいる。上海では毎朝手を引き、登園バスへ送り届ける。周りを警戒し、いつしか一定の緊張をまとうようになっていた。

だが、幼い子に刃を向けたのも中国人なら、こうして凶行を嘆き、涙を流して亡くなった子を悼む大勢の人たちも中国人だ。この姿もまた、いまテレビが伝えるべき中国社会の大切な現実だった。献花のカードの一つにはこう書かれていた。「坊や天国に憎しみはないよ」

政府と国民 分けて報道を

事件から1カ月が過ぎ、日本人社会の「警戒モード」はむしろ強まっているように感じる。

一番弱い立場の子どもが襲われたうえ、何より犯人の狙いや動機が中国側から一切明かされないことが、不安に拍車をかけている。蘇州や深圳ではバス停の警備が強化されたが、過渡的な対策にすぎない。

中国政府は「偶発的な事件」との説明の一点張り。日本側の関係者は「中国は、うやむやに物事を終わらせるのが巧みな国だ」ともらす。都合の悪い事件では、情報をシャットダウンし、関心が冷めるのを待って収束させてしまう――。しかし、こうした思惑は、必ずしも一般市民の気持ちとは一致しないことも知った。

事件への怒り、政府に対する懐疑と、中国の人々への感情とは冷静に切りわけて報じる必要があるだろう。政治的摩擦が続く中、憎しみをあおるのではなく、いかに事実を伝えるか――。記者自身の視線も問われていると感じる。

おざき・ふみやす▼全国紙社会部で勤務後に2015年朝日放送テレビ入社　報道情報番組デスク・司法・内政班キャップを経て　6月から現職

能登半島 記録的豪雨

被災 防災 減災

最前線㉝

「逃げるわけにはいかない」

多様な声を届ける理由

高倉　正樹
（読売新聞北陸支社金沢支局）

元日の能登半島地震で壊れ、解体されずに残っていた家々が、あちこちで土砂にのまれ、無残な姿をさらしていた。強い雨がヘルメットをたたく。自衛隊員が土砂や流木を黙々と乗り越えて捜索現場に向かっていく。

記録的な豪雨が降った9月21日、石川県輪島市の景色は一変していた。

雨があがった翌日の午後、河原田川沿いの自宅の泥をかき出している老夫婦に出会った。地震で準半壊に認定された一軒家の修繕を1000万円ほどかけて終えたところだったという。洗濯機や冷蔵庫は床に倒れ、地震後に新調したエアコンもテレビもだめになった。

■「能登ばっかり、何回も」

「能登ばっかり、こんなに何回も……」と妻が嘆いた。隣で夫は、よく夫婦で楽しむという釣りの話をしてくれた。それから淡々とした口ぶりで言った。「被災するたびに色んなものを捨てて、思い出は一つも残らん。でも、ここから逃げるわけにいかんじゃない？」

古里にとどまることを選択する理由はさまざまだ。珠洲市の若い漁師は、ここは自慢のキリコ祭りがあるからと言った。自宅が地震で全壊した88歳の女性は、県南の避難先は嫌だと訴えて珠洲の特別養護老人ホームに入った。「顔を知っている人ばかりで心が休まる。もうどこにも行きたくない」という。

災害が何度繰り返されても、逃げるわけにいかない。今春まで通算10年弱勤務した東日本大震災の被災地でも、似た言葉をよく耳にした。津波常襲地の三陸地方では、被災した人たちが一時離れた後、浜に戻ってまた暮らし始める、ということが歴史的に繰り返されてきた。13年前の震災でもやはり同様のことが各地で起きている。昭和の三陸大津波（1933年）を調査した民俗学者の山口弥一郎は、漁村の人びとが高台移転しようとしない理由に、氏神や屋敷墓地などの習俗や信仰を挙げている。



山側から土砂が流れ込み、民家が押し流された現場。ガードレールがめくれ上がっていた（9月21日/石川県輪島市門前町/筆者撮影/読売新聞社提供）

■家族の変化 時間かけ追う

人それぞれ、その土地には心のよりどころがある。それが災害からの回復力（レジリエンス）の源になる。

能登や三陸のように集落がまばらに点在している地域は全国にいくらでもある。人口減少が加速する時代に、コスト面を考えてインフラや公共施設を集約化しようとする流れは止まらない。怖いのは、人が減っていくにつれて、一人一人の声がしだいに軽んじられることだ。報道はそれにあらがって、多様な言葉を拾い届ける役割を引き続き果たさなければならない。

4月に始まった「歩む」という弊紙の社会面連載はその試みの一つだ。能登半島地震で被災した七つの家族を3カ月、6カ月、1年と定期的に取り上げ、家族の変化をとおして復興を長期的に追っていく。主に金沢支局の若手記者が担当し、筆者が企画全体を取りまとめている。

連載に登場する輪島塗職人の男性は幼なじみの妻を地震で亡くし、仮設住宅に一人で暮らしている。仕事を再開できず、慣れない災害ごみ分別のアルバイトでへとへとになって生計を立てる日々。たまに知人から漆器の修復や塗装を頼まれる。そのときだけは「やっぱり俺にはこの仕事や」と充実感に包まれる。再起の足がかりをつかんだかに見えた生活は、9月の豪雨で仮設住宅が床上浸水してしまい、またもや暗転する。

東日本大震災で同じく被災地の家族を追いかけた「3・11の記録　家族」は10年間続いた。大所帯が目立った当時と比べ、今回は一人暮らし世帯や外国人の母親が登場し、変わりゆく家族の形も紙面は映している。能登の連載が何年続くか分からないが、今後も多様な声を届けていく。

たかくら・まさき▼1997年入社　編集局社会保障部　東北総局（仙台）　福島支局　石巻支局などを経て　5月から現職

私が会ったあの人

吉田正紀さん　元海上自衛隊海将、前防衛大臣政策参与
日米関係の「ガーデナー」

佐藤　祥太（TBSテレビ）

ホワイトハウスから歩いて数分の近さにあるガラスと大理石造りのモダンなビル。靴音が響く高い天井のロビーを抜けて9階に進んだ部屋で月1回、とある〝サロン〟が開かれる。米ワシントンDC在住の研究者や外交官、メディア、ビジネスマンなどが、アメリカは、そして日本との関係は今どこに向かっているのかを議論する会。その元締めは、敬意を込めて「提督」と呼ばれている。

吉田正紀（まさのり）氏は、1979年に入隊後、佐世保地方総監で退官するまで35年間、海上自衛隊一筋。海将になった正真正銘の「提督」が、なぜ〝サロン〟を主宰しているのか？

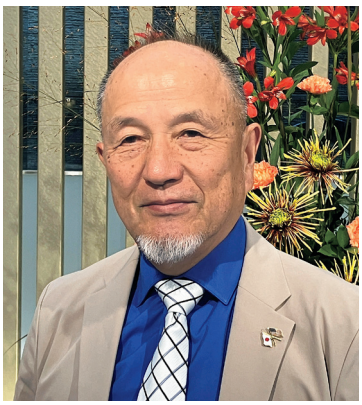
源流は2005年から3年間の在米日本大使館・防衛駐在官時代だという。当時の加藤良三大使からの「日米同盟のガーデニングを」という助言で勉強会を開始。退官後に「民間人としてのガーデニング」を志して双日米国副社長に転じ、15年に再びワシントンに赴任してから談論風発の場を立ち上げた。途中入退場OK、肩書に関係なくオフレコで共学を掲げている。

■「オレが鍛えてやろう」

そんな吉田氏との出会いは17年。念願のワシントン特派員になったものの経済部が長く、安全保障の取材は〝ゼロ近傍〟。略語だらけの会見や発表文と格闘する日々の中、知人に「教えを乞うべき方がいる」とつないでもらった。

緊張しつつ内情をお話ししたところ、眼光鋭かった「提督」がニッコリと笑って「よしっ、オレが鍛えてやろう。正面からくるヤツぁ大事にするんだ」と言ってくださり、胸をなでおろしたのを覚えている。まだ少人数での共学はとても刺激的だった。

吉田氏は防衛駐在官時代に人脈を駆使して米軍制服組トップ・統合参謀本部議長が通うスポーツジムを割り出し、距離を縮めたという情報のプロ。長年養った戦略眼とネットワークを基にテーマを決め、発表者を選び、議論を紡ぐ。テレビで言えば「プロデューサー」と「MC」を兼ねる手腕と努力には敬服するほかない。


吉田正紀さん（2024年/TBSテレビ提供）

■月1〝サロン〟260人激論

会員は現在260人余。コロナ禍を経て、現地土曜朝にウェブ上で開かれる〝サイバーサロン〟が軸に。日本は夜のため、参加する第一線の方々がみな少しリラックスした装いで激論を交わすのもまたこの会らしい。

吉田氏がリラックスする姿を拝見したこともある。海をモチーフにした飾りで彩られたお宅で、関係者を招いて不定期に開催される「居酒屋・吉田亭」だ。強面の「提督」も2度のワシントン暮らしを支えてきた奥さまの美貴さんにはやられっ放し。笑顔を絶やさない美貴さん手作りの絶品餃子を頂きながら、〝夫婦漫才〟と縦横無尽の日米よもやま話で盛り上がる楽しい時間だ。

その場で私は気鋭のアメリカ研究者、慶應義塾大学の中山俊宏教授と親しくする機会に恵まれた。その後も、ともに若いころ米中西部で暮らした経験をベースに、政治・経済はもとより音楽やスポーツなど「文化」の視点からもアメリカを語り合えたのはとても豊かな時間だった。一昨年、中山教授が55歳の若さで鬼籍に入ったのは本当に悲しく、残念だ。

帰任後も参加している月1回の〝サロン〟と、そこでの出会いは私にとってかけがえのない財産だ。「もうちょっと花を咲かせろ」とからかわれそうだが、日米関係の「ガーデナー」に育てていただいている恩義を、いつかは返したいと考えている。

（さとう・しょうた　2002年入社
現在　報道局経済部デスク）

次号は佐藤さんが経産省で変容するエネルギー政策をともに取材した田中美恭さん（共同通信社）にバトンが渡ります。

金大中事件 10年後の特報
日本の公安 拉致前に察知



金平（かねひら）　茂紀（しげのり）
1977年ＴＢＳ入社　モスクワ支局長　ワシントン支局長「筑紫哲也ＮＥＷＳ23」編集長　報道局長などを歴任　2010年から24年まで「報道特集」キャスター　04年度ボーン・上田記念国際記者賞　22年度外国特派員協会「報道の自由賞」受賞　早稲田大学大学院客員教授　沖縄国際大学講師などを経て　現在　フリーランス・ジャーナリスト　日本ペンクラブ言論表現委員長　著書に『沖縄ワジワジー通信』『筑紫哲也「NEWS23」とその時代』など

１９７３年８月に起きた金大中（キム・デジュン）事件。戦後公安事件の中でも、その態様の粗暴さが突出していた事件だ。韓国の諜報機関ＫＣＩＡ（韓国中央情報部）要員が、東京滞在中の野党政治家トップ＝金大中氏をホテルから拉致・監禁の上、船に乗せて関西から密出国、韓国ソウルに連れ戻されたという事件だった。ソウルでの金氏は負傷していて憔悴（しょうすい）しきっていた。拉致の舞台は東京のホテル・グランドパレス。まるでスパイ小説のようなミステリアスな事件の全体像については、すでに多くの諸先輩が取材成果を世に問うている。国境の存在を全く無視したかのような大胆な犯行は、今で言えばイスラエルのモサド並みだが、朴正熙（パク・チョンヒ）政権下での出来事で、これほど露骨な主権侵害ではあったものの、処理を誤れば、日韓関係は大変な局面に立ち至ることは必至の情勢だった。金大中氏を招いたのは、自民党の宇都宮徳馬代議士らで、当時は自民党の一部にも、韓国の民主化運動への共鳴がまだあった時代である。

◆公安担当記者から始まる

記者のイロハはサツ回りから。そんな超古くさい考えが当たり前のような時代に、筆者はＴＢＳの社会部記者から報道の仕事を始めた。80年代初頭の3年間にわたって警視庁の記者クラブに在籍した。幸か不幸か、筆者の担当は警備・公安。よくもまあ筆者のような人間を警備・公安担当などに据えたものだと思う。当時のＴＢＳはそういう気まぐれな人事をやる余裕があった。だが仕事をやらされる立場から言えばたまったもんじゃない。率直に記せば、取材先で冷ややかな視線を感じることが多かった。「お前さん、顔に反権力って書いてあるよ」とか酒席でからかわれたこともあった。そんな中で、庁内をぐるぐる廊下トンビを繰り返したり、昔の資料を読み返したり、当事者たちと直接会うという基本作業を日々続けていた。

当時の警視庁が摘発した公安事件では、80年の自衛隊スパイ事件（宮永事件）があった。陸上自衛隊の陸将補がソ連（当時はまだ存在していた）の諜報組織ＧＲＵ（ソ連軍参謀本部情報総局。ロシア連邦にまだ現存）所属の駐日大使館員（コズロフ大佐）に、自衛隊内の資料を渡していたとして逮捕された。捜査にあたったのは警視庁公安部外事1課で、当時の課長は大森義夫氏（のちの内閣情報調査室長）だった。ＮＨＫが夜7時のニュースでトップニュースで報じ、当時の公安担当記者が全速力ダッシュで外事1課長室になだれ込んでいった光景を今でも覚えている。公安当局がＮＨＫにリークして書かせたことをその後、大森課長から直接聞いた。

◆「これ見てみろよ」と写真

当時、外事警察には外事2課というもうひとつの部署があって、こちらは朝鮮半島や中国の動向を担当していた。その外事2課の管理官の一人（以下Ｖと記す）が、なぜか親子ほどの年齢差があるのだが、「お前はいやに熱心だな」と声をかけてくれるようになった。警視庁公安部内で管理官と言えば、ノンキャリのトップにあたり、実力のある叩き上げの人材が配されていた（当時は）。Ｖも典型的な職人タイプの管理官だった。一方でＶはどこか人間味というか、自分のプライベートな部分ま

であえてさらけ出すような性格で、よく居酒屋などで会って話を聴いた。

ある日、Vの席を回って昔話をしていたら、おもむろに机の引き出しをあけて「これを見てみろよ」と言って、大きな茶封筒に入ったモノクロ写真を見せてくれた。Vは「これ、何だか分かるか？」と笑みを浮かべながら尋ねてきた。写真は鮮明とは言い難いものの、走行中の車両を後ろから撮影したもので、四つ切りサイズで数枚あった。Vは写真を見せながら以下のような説明をした。

◆「何かやる、確信していた」

「君らは、事件は金東雲一等書記官の指紋が現場から見つかってKCIAの犯行と分かったという発表を鵜呑みにしているんだろうが、実は私らは、事前に何かをやるんじゃないかと確信していた。これは金大中を尾行している連中をわれわれが尾行して撮ったんだ。韓国大使館の諜報部門の連中が金大中をあまりにも露骨に追尾して奇妙な動きをしているので、『やめろ』と警告していたんだ。主権侵害になるからな。そうしたら目の前でやっちゃった」

Vは写真のほかに捜査報告書のコピー（青焼きのゼロックス）を示して、「ここに決済のサインがあるだろ。これ、三井さんのだ」と示した。そこには滞日中の金大中氏をめぐる実に詳細な行動情報が記されていた。何時何分にどこで誰と会っていたか等。外事2課は彼の動向をつぶさに見ていた。三井さんとは事件発生当時の警視庁公安部長・三井脩氏である。

筆者は驚いた。あの事件は警視庁の地道な捜査が実って、ホテルの壁から金東雲一等書記官の指紋が検出され、KCIAの犯行と判明、彼らが犯行の実行犯と断定する形で発表されたのだが、そうではなかったのか。事件後、警視庁から出頭を求められた金書記官は、外交特権を行使して韓国にすでに帰国していた。

この事件の関連では、筆者は2002年12月に、ドナルド・グレッグ元駐韓大使に米ニューヨークで直接会って話を聴いた。金大中氏がKCIAによって殺害され、日本海に遺体が投棄されるという最悪シナリオを避けるべく、ヘリコプターが緊急出動し、日本海上空から金大中氏を乗せた船に対して「殺害をやめよ」と警告した事実を認めた。米国内のグレッグ氏ら朝鮮半島の専門家らは、独裁的な朴正熙政権の長期化を望んでいなかった。その対抗馬として金大中氏を有形無形に支援していたことは明らかだった。



「金大中事件」捜査について記者会見する三井脩警視庁特捜部長兼公安部長（1973年11月1日／東京都千代田区の警視庁／時事通信社提供）

朴正熙はその後、身内によって暗殺され（79年）、韓国は全斗煥ら何人かの軍人出身大統領らを経て、98年に金大中が大統領に選ばれる。さらには朴正熙の娘の朴槿恵が13年には初の女性大統領に選ばれるなど、朝鮮半島の歴史のダイナミズムを感じさせられる。

83年8月2日、TBS系『ニュースコープ』で筆者らは次のようなニュースを特報として報じた。〈10年前に起きた金大中事件の捜査本部が昨日解散されましたが、日本の公安当局は事件発生前に金大中氏の拉致計画を知っていた事実が明るみに出ました〉。他社からは完全に無視されたが、それも当然で、ニュースソースにたどり着くことがほぼ不可能だったからだ。放送するにあたって、三井警察庁長官の定例記者会見で担当記者に質問してもらったが、三井長官は絶句して言葉を発せず否定も肯定もしなかった。V管理官はもう20年以上前に亡くなられた。筆者は02年に金大中氏（当時大統領）にお会いすることができた。金大中氏はセンシティブな部分はすべて日本語で話した。

◆二分法レンズへの懸念

こんな大昔の駆け出し記者時代のエピソードを記憶の抽斗から引っぱり出してきて書こうと思ったのには理由がある。ミイラ取りがミイラになるの言葉通り、公安情報、諜報分野の秘密情報は、それを取材している記者をある種の自家中毒に陥らせることがある。このミイラ取り病にいったん罹患してしまうと、その記者、その人物はなかなかその考え方の枠組みから出られなくなってしまう。敵／味方、スパイ／味方、活動家／味方、悪者／正義、非同盟国／同盟国といった二分法のレンズを通してしかものごとが見えなくなる。記者だけでなく、政治家や学者のなかにもよくみられる。この傾向が近年、この国をおかしくしているのではないかという思いが強くある。杞憂に終わればよいのだが。

試写室
(10.23)

草原の英雄ジャロロフ ～東京への道～



金メダルへ家族愛の並走

映画「草原の英雄ジャロロフ、東京への道」は題名の通り、ウズベキスタンのボクサーで東京、パリ五輪の金メダリスト、バホディル・ジャロロフさん（30）の半生を描いた作品である。試写会では未完のままの上映だったので論評はせず、ラッシュのスクリーンを見ながら思ったことを二つ述べてみる。

一つは家族のことである。ウズベキスタンの人気俳優ダダホン・オビドフさんが演じる青年ジャロロフは身長約2メートルという恵まれた体格を生かしスーパーヘビー級への道を歩き出す。負ければ、父は「息子よ。敗者とは倒れた者のことではない。立ち上がれなかった者のことをいうんだ」と厳しく諭す。母の愛は言うまでもなく優しく深い。息子は報いることにひたすら打ち込む。不屈に並走するのは家族愛というアジア的価値観である。家族より個人ではなく、その個人を家族が支える。



試写会前に会見するジャロロフさん

もう一つは国際感覚だ。ウズベキスタンは旧ソ連の一員だった。昔モスクワではウズベクから出稼ぎのタクシー運転手をよく見かけた。そのソ連の崩壊後は全方位外交に転じ、9・11テロ後にはアフガンに出撃する米軍に基地を提供した。だが東部アンディジャンで武装勢力による刑務所襲撃、反政府暴動が起きる。鎮圧部隊の発砲で市民多数の死者が出ると米欧は非難、それに反発するように草原の国はロシア、中国に接近した。G7が往時の力を失い、BRICSが伸長する中、映画ではアメリカ側が不正を働く悪役として描かれる。その辺りもまたこの国の行方を占うための見所なのかもしれない。日本・ウズベキスタン合作。加藤雅也さんとロシア語に堪能な山本修夢さんが共演する。アククロム・イサコフ監督・脚本。

東京新聞出身　深田　実

11月8日から東京・ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国で公開
配給 平成プロジェクト ©2024 Conglomerate Production

サイバー記者ゼミ②

「サイバー脅威のリアルと能動的サイバー防御の現在地」

10・5／講師：第1部　松本隆　株式会社ディー・エヌ・エー システム本部セキュリティ部公認不正検査士、第2部　川口貴久　東京海上ディーアール　主席研究員／出席：会場38人、ウェブ34人

第1部では、闇サイトがはびこる「ダークウェブ」などサイバー空間の裏側でどのような事が起きているのかなどを、様々なサイバー犯罪について日々情報収集をしている松本さんが解説した。第2部では政府が推進している「能動的サイバー防御」の概況を、政府有識者会議の委員でもある川口さんが紹介した。

（事務局）

土曜記者ゼミ

調査報道⑤ 傍聴ブロック～2人の記者、それぞれの取材～

10・19／講師：團奏帆　共同通信社東京エンタメ取材チーム・文化部記者、森田真奈子　東京新聞横浜支局記者／出席：会場18人、ウェブ22人

同業者との連携 心の支えに

横浜市教育委員会が、2019年度から今年4月まで、市の教員による児童・生徒への性犯罪事件の公判に多数の職員を動員し、一般市民が傍聴できないようにしていた。この問題は、共同通信の團さんと東京新聞の森田さんが粘り強い取材を続けたことで発覚した。

今年初め、2人は情報提供を受け、教員の性犯罪事件の公判が始まることを知った。法廷に向かうと、事件は未公表にもかかわらず、スーツ姿の男女が長い列を作り、傍聴席は満席だった。だが傍聴者はメモを取る様子もなく、傍聴の理由を尋ねても答えるのが嫌そうな態度だったという。この状況に2人は「何か起きているのではないか」と違和感を抱いた。次の公判後、個々に傍聴人を尾行し、市教委の建物に入るのを確認。職員が動員されていると確信した。

市教委に対し、森田さんは出張記録の文書の開示を請求。團さんは質問状を送付し、動員の事実を認める回答を得た。市教委から記者会見を開くと知らされた團さんは、急いで会見前にスクープとして速報。森田さんは翌日、傍聴者を尾行したサイド記事を出し、それぞれ注目を集めた。

2人は取材を進める上で「他社の記者と違和感や、憤りを共有できたことは心の支えになった」「2人でどうやったら記事として出せるかなど話した。こうした連携は重要だったと感じた」とそれぞれ話した。

（事務局）

マイBOOKマイPR

『政治家は悪人くらいでちょうどいい！』

乾　正人（産経新聞社上席論説委員）

悪人でないと宰相務まらない

「このごろ石破さん、人相が悪くなったわね」

政治にほとんど関心のない家内だが、たまに正鵠を射ることを言う。確かに首相になってから石破茂の顔つきが険しくなった。

そりゃそうだろう。これまで「党内野党」として「言論の自由」を謳歌していた気楽な立場が一変し、自らが発するたった一言で政局だけでなく、株価や為替相場が動くのだからむべなるかな。「悪人」でなければ宰相は務まらない、というのが結論だが、意外と面白いですよ。



ワニブックス
1,760円

『冷戦終結からウクライナ戦争へ　ドイツ統一、ソ連崩壊の原点から考える』

岡田　実（北海道新聞出身）

つながる平和と戦争

35年前、米ソ首脳による冷戦終結宣言は、人々に「平和な時代が来る」との希望を抱かせた。しかし現在、ウクライナ戦争、ガザ紛争に見られるように世界は混迷の時代に入ってしまった。なぜなのか？　ドイツ統一、ユーゴ紛争、ソ連崩壊など冷戦終結に派生して起きた歴史的事件が、ウクライナ戦争を引き起こしたと言っても過言ではない。当時の激変を現場で取材した筆者が、欧州現代史を振り返り、「平和」が「戦争」に取って代わっていった経過を解き明かす。



文芸社
1,650円

『異端　記者たちはなぜそれを書いたのか』

河原　仁志（共同通信出身、新聞通信調査会事務局長）

〝業界常識〟越えた報道の内幕

SNS上の発信とは異なる新聞ならではの仕事とは何なのか。珠玉の記事とはどのように編み出されるのか。本書は世の中をうならせた地方紙・在京紙の七つの報道の内幕を取材し、新聞の本質とは何かを探ったドキュメントです。自社特ダネの再検証、オフレコ破り、客観報道からの脱却……。そこに共通していたのは、皮肉なことに新聞界が守ってきた〝常識〟や〝秩序〟を乗り越えようとするアニマルスピリッツ、つまり「正統」から外れた「異端」の思考でした。



旬報社
1,870円

『風になった優ちゃんと学校給食』

馬場　錬成（読売新聞出身）

学校給食・食育ものがたり

いま学校給食が進化して、美味しさはレストラン顔負けになっています。郷土料理、お袋の味の伝承する場でもあり、生活習慣病予防と長寿国の原点になっています。食材選定から調理、栄養・衛生管理、食文化の学びまで多彩な教育に広がっており、世界にない食育と栄養教諭制度は偉大なソフトパワーです。その現状と正しい理解を児童・生徒から大人まで共有するため、児童本にしました。お子さん、お孫さんと一緒にお読みください。



評論社
1,760円

『二人のウラジーミル　レーニンとプーチン』

伴野　文夫（NHK出身）

レーニンの失敗を解剖

今年はレーニンの死から100年。名編集長藤原良雄氏にお世話いただいてソヴィエト社会主義連邦の崩壊に至ったレーニンの理論的な失敗を解剖する本書を上梓することができた。レーニンは国家消滅論を唱え、国家に替わり独自のプロレタリア独裁論をはめ込むという誤りをおかした。

一方マルクスは階級と搾取なき自由と民主主義の社会、アソシエーション（協同体）を目指した。両者の思想は相いれない。70年間世界をだまし続けたマルクス・レーニン主義という思想はあり得ないのだ。プーチンのレーニン主義を追う大ロシア主義も、過酷なウクライナ侵略をおかす。マルクスにかけられた「冤罪」は晴らされなければならない。



藤原書店
2,420円

『ゼロからの著作権　学校・社会・SNSの情報ルール』

宮武　久佳（共同通信出身）

あなたの記事、その著作権は？

フリーの記者なら著作権はあなたのもの。しかし新聞社の社員として書いた記事の権利は会社にあり、あなたにはありません。

入社して数年間、私は著作権を知らないまま記事を書いていました。「新聞記事は公共財産。著作権なんて関係ない」と誤解していたのです。

パン屋でドラえもんやアンパンマンのパンを見かけませんか。子どものころ、先生がいきなりあなたの作文を読み上げたことはありませんか。いずれも著作権の問題です。



岩波書店
1,034円

日本記者クラブ賞・同特別賞の候補をご推薦ください

2025年度日本記者クラブ賞・同特別賞の候補者を募集します。両賞の候補推薦を募集する案内を今月、プレスの基本会員と個人会員全員にメールまたは郵送でお送りします。

両賞とも「プロが選ぶベストプロ」に与えられる賞として日本のジャーナリズムの高い水準と優れた業績を示すものであり、当クラブの公益目的事業でもあります。未受賞であれば、以前、推薦された候補を再度、応募されても構いません。

来年1月31日（金）に募集を締め切り（必着）、推薦委員会と選考委員会の2段階で審査を経て、4月の理事会で受賞者が決まります。贈賞式は5月末に行います。

▼日本記者クラブ賞

この賞は「取材、報道あるいは評論活動などを通じて、ジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰するもの」（日本記者クラブ賞規約2条）です。会員または法人会員社に属する現役ジャーナリスト個人を対象に、個別のスクープではなく、最近数年間の業績が顕著であることを重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

創設から半世紀以上の歴史を持ち、これまで60人が受賞し、2024年度は、40年以上にわたり永田町のパワーゲームを深く取材してきた共同通信客員論説委員の後藤謙次さんが受賞しました。

▼日本記者クラブ賞特別賞

2012年度に新設され、原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。また外国人や故人も対象です。クラブ会員だけでなく日本新聞協会あるいは日本民間放送連盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。

2024年度は北海道放送ヤジ排除取材班、テレビ静岡「イーちゃんの白い杖」取材班が受賞しました。

◇

両賞とも、日本記者クラブのウェブサイトにある応募フォームに必要事項を入力のうえ、参考資料を事務局に提出してください。https://www.jnpc.or.jp/award2025

映像・音声資料はデータ共有での応募も可能です。

詳細は事務局の杉本（03―3503―2727）へお問い合わせください。

「クラブ賞」応募フォーム

会報委員から

官邸Xの敬う相手

新聞社には校閲部がある。

現場の記者が書き、記者クラブのキャップや本社のデスクを通過した原稿（原形をとどめないこともある）をチェックする。言葉遣いや事実関係が誤っていないかと目を光らせるプロがそろっている。

筆者の属する論説委員室も大変世話になっている。ベテラン記者が書く原稿でも間違いが見つかったり、より適切な表現を提案されたりして「校閲さんがいてよかった」と感謝することがある。

本会報の読者には当たり前の話だが、記事はネットや紙面で多くの人に読んでもらうのだから、慎重の上にも慎重を期している。

さて、石破茂内閣の発足後、首相官邸の公式X（旧ツイッター）におかしな投稿があった。

石破首相が10月5日に石川県能登地方を視察したところ、官邸の公式Xが「石破総理は能登の被災地を訪問し、お一人お一人と話され、困難な環境下にある人々のために力を尽くす決意を新たにされました。」と投稿したのである。

首相官邸のXが、内閣の首座にあるとはいえ、いわば身内である首相の言動に敬語を用いることなどあってはならない。首相は天皇陛下や皇族方ではないのだ。

自民党の佐藤正久参院議員が自身のXで「日本語が変」「違和感満載のツイート」と投稿したのはもっともだ。官邸の投稿は同月6日、敬語を外した文章に改められた。

岸田文雄政権ではこのような失態はなかったようだ。石破首相が連れてきたスタッフに問題があったのか、それ以外の理由があったのかは今のところ不明だが国語の使い方には留意してほしい。首相を含め国会議員は言論の府の一員でもある。

統治をめぐり東洋では「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」という。ここでいう「文章」は文学を指すが、文学以前の文章であればなおさら間違えてほしくない。

産経新聞社論説委員長　榊原　智

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 十一月お献立（11/29まで）

先付前菜：柚子カステラ、どんぐり玉子、合鴨ロース、揚げ銀杏、海老芝煮　馬上杯：ずいきとコンニャクの合いまぜ　椀盛り：ずわい蟹真丈　五色湯葉など　造り：八角と鮪二種盛り　焼き物：鰤照焼 菊花酢　炊き合わせ：鯛かぶら蒸し、寄せ道明寺など　食事：せいろそば　水菓子：キャラメルケーキと柚子シャーベット（5,500円）　（板長：薫田勝）

洋食 季節のおすすめコース（11/29まで）

帆立貝と柿のカルパッチョ、ごぼうのポタージュ、牛フィレ肉のソテー 干しぶどう入り赤ワインソース、かぼちゃのプディング、コーヒーまたは紅茶、パンとバター（4,400円）。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。（シェフ：佐藤和治）

＜法人代表変更＞

・エフエム東京
唐島夏生 代表取締役社長執行役員（旧 黒坂修氏）
・TVQ九州放送
浅見昭彦 代表取締役社長（旧 平岡啓氏）

■訃報

堀内稔会員（読売新聞出身、94歳）が10月17日、死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

HP情報 https://www.jnpc.or.jp/

■ノーベル平和賞

日本原水爆被害者団体協議会の会見動画公開中



今年のノーベル平和賞受賞が決まった日本原水爆被害者団体協議会で長年、事務局長を務めた田中熙巳さん（92歳、現在は代表委員）は当クラブで過去に2回（2011.8.23、16.5.19）会見をしています。２つの会見の詳録と動画を公開しています。

今後の行事予定（11/1現在）

18㊊	13：00～14：30　10階ホール 「変わる『家族』」⑤ 林伴子 内閣府政策統括官
25㊊	13：30～15：00　10階ホール 「巨大地震を考える」⑤ 関谷直也 東京大学大学院教授
27㊌	14：00～15：30　10階ホール 「中国で何が起きているのか」㉒ 増田雅之 防衛研究所中国研究室長

新しい個人D会員

中村（なかむら） 直樹（なおき）



1989年読売新聞大阪本社入社、大阪社会部。98年テレビ朝日入社、バンコク支局長、社会部長、報道ステーション担当部長など歴任し8月退社。現在、秋田朝日放送取締役。

これまでの経験を生かしつつ、新しい仲間たちと、地方の良さ、課題をしっかり発信していきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

吉田（よしだ） 俊介（しゅんすけ）



1987年テレビ朝日入社。取材デスク、国会映放クラブキャップ、番組デスクなど。現在、テレビ朝日福祉文化事業団イベント担当部長。

報道、福祉現場の経験を生かした取材活動を継続していく予定です。よろしくお願いします。

■会議報告

●第457回会報委員会（10．7　大会議室）

11月号の編集について協議した。

出席　榊原委員長、森、荒川、萩原、古賀、稲澤、倉重、二村の各委員。

●第554回企画委員会（10.11　会見場＆オンライン）

新任の山下毅委員（NHK）があいさつした後、今後の企画について意見交換した。

出席　藤井委員長、行方、井田、西山、佐藤、澤田、橋本、猪熊、大内、菅野、辻本、乾、加納、森田、杉田、川上、小林、中村、森、早川、山口（哲）、山下、出川、川戸、播摩、小栗、立石、石原、江川、迫田の各委員。

●第566回会員資格委員会（書面）

11月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

●第717回理事会（書面）

副理事長に原聖樹氏（NHK）就任

①日本記者クラブ賞の規約と内規にもとづき、2025年度の日本記者クラブ賞と同特別賞を実施することを決定した。

②第24期日本記者クラブ賞推薦委員を下記の個人D会員に委嘱することにした。

今井環さん（NHK出身）、内城喜貴さん（共同通信出身）、河野博子さん（読売新聞出身）、 滝田洋一さん（日本経済新聞出身）、西村陽一さん（朝日新聞出身）、横山隆晴さん（フジテレビ出身）

③NHKの傍田賢治氏から原聖樹氏への理事交代を承認した。

④それを受けて前任の傍田氏が務めていた副理事長に原聖樹理事を選任することを承認した。

⑤会員資格委員会が審議した11月1日付入退会を承認した。

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723　●会員事務……☎3503-2727
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766　●経　　理……☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ…☎3503-2724　●クラブ行事への申し込み…☎3503-2722
●受　　付……☎3503-2721　●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況　●法人会員：126社　●基本会員：711人　●個人会員：1,012人　●法人・個人賛助会員：53社・112人　●特別賛助会員：98人　●名誉・功労会員：12人　●学生会員：77人　計179社・2,022人

会報委員会

委員長＝榊原　智
委　員＝荒川　康一　稲澤　裕子　勝田　洋人　倉重　篤郎　古賀　靖典　佐藤　庄太　志賀　英樹　二村　伸　萩原　豊　森　一徳
（事務局：本庄五月　西村志織）
☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：水野（みずの）　陽介（ようすけ）（共同通信大阪支社写真映像部）



2025年大阪・関西万博の会場。木造巨大屋根「リング」が取り囲む＝10月12日、大阪市の夢洲（共同通信社ヘリから）

あのとき、時代は変わった

同じ内容でも繰り返し記事になる話題がある。東京と大阪の「エスカレーターに立つのはどちら側？」もそのひとつだ。転勤した記者たちが驚いて次々と記事にしたという説もある。過去の大手各紙を見ても「空けるのは右？左？」（1994年4月）▽「北新地駅『左側空けて』大阪ルール」（97年3月）▽「関西なぜ『右立ち』」（2014年12月）▽「立つ位置左右の分かれ目は？」（16年11月）と連打されている。コラムや投書欄にも再三取り上げられた。

「＊諸説あります」のテロップを流しながら話をしたい。「大阪の右立ち」は阪急電車のアナウンスに始まり、1970年の大阪万博で定着したという説がある。関西出身の私は「大阪万博定着説」に共感する。万博会場を訪れた小6の私は時代が変わる光景に高揚した。「月の石」拝観は3時間の行列に耐えられず断念したが、多彩なパビリオンに驚き、コロンビア館のコーヒーは、私を終生の愛飲者にした。交通渋滞の苦痛を知り、オーバーヒートで開いたボンネットに「クルマ社会」を実感した。大阪万博は「右立ち」を含め新しいルールを定着させたと思うのだ。

さて、あれから55年、来年の大阪・関西万博である。準備の混乱を見るにつけ2021年の東京五輪を連想してしまう。競技場建設やエンブレムに始まる様々なトラブルのあげくに汚職事件の顛末（てんまつ）。誘致が決まった13年9月、私は毎日新聞にこんな署名コラムを書いていた。

「半世紀前の東京五輪を、私たちはいつも懐かしく思い、誇りに感じてきた。7年後の東京五輪も、半世紀後の未来へ胸張れるものでありたい」

同じ言葉を万博に贈りたいのだが、どうだろうか。エスカレーターも「両側立ち」を呼びかける時代に変わった。

（毎日新聞出身　小川　一）